

岩手・宮城内陸地震後のコミュニティ再生

講演者：佐々木豊志（くりこま高原自然学校 代表）

司会：池田忠義（東北大学）

企画：第12回大会準備委員会

講演要旨

くりこま高原自然学校は1996年に栗駒山の高原地帯にある耕英地区に開校した。耕英地区は戦後、満州からの引揚者が開拓した地域で今は40戸ほどの小さな集落である。ブナの原生林を伐採し、炭焼き、ナメコ・高原イチゴ・高原大根の栽培、岩魚の養殖、近年は寒冷な気候を利用した生花の栽培と時代を追って様々な取り組みをしてきた。

昨年6月に発生した「岩手・宮城内陸地震」は、震源域に近い耕英地区に大きな被害を与えた。耕英地区に通じる全ての道は寸断されて孤立し、地区内にある駒の湯温泉は甚大な被害と犠牲者を出した。被災しても生活する力がある自然学校や地区住民は避難するつもりはなかったが、行政から41戸100名余りの全住民への避難指示が出され、全住民が断腸の思いで山を降りた。そうしてほぼ一年にわたり、地域を離れた避難生活を送ることとなった。

個人的には、阪神淡路大震災の救援ボランティアの経験が生きることとなった。震災からおよそ一ヶ月後には、耕英地区全住民による「くりこま耕英震災復興の会」を組織した。その後はこの組織を通じてコミュニティの再生に取り組んできた。

この震災によって耕英地区というコミュニティに何が起き、何が生まれ、行政や関係機関、避難住民の中にどんな意思決定が生まれたか、コミュニティの再生にあたってどんな問題があらわになったのか、今日までの経過を振り返り、この地域のコミュニティのあり方や課題について考えてみたい。

〔略歴〕

岩手県遠野市出身、盛岡市育ち。現在は宮城県栗原市栗駒在住。

高校卒業後、1996年、筑波大学体育専門学群入学。2年次から第一専攻：野外運動、3年次から第二専攻：体育原理。これらの学業と並行して、幼少年キャンプ研究会・野外活動研究会・山岳部の活動にも取り組み、「濃密なアウトドアな生活を送る」中で、野外運動や野外教育に関する学習と実践を重ねる。

1982年、放送局関連会社に勤務し、野外教育事業に関わる。その傍ら、日本アウトドアネットワーク（JON）の設立にも関与し、1995年の阪神淡路大震災に際しては、ボランティア先遣隊として支援活動を行う。

1997年、「くりこま高原自然学校」を開校し、様々な野外教育の実践に取り組む（以下に詳述）。2008年6月、岩手・宮城内陸地震で被災し、栗駒山（耕英）からその麓（松倉）へ移る。被災後は、下山を余儀なくされた耕英地区を始め、栗駒のコミュニティ再生に向けて尽力する。そのプロセスを自身のブログ（「豊志のくりこま高原物語」）で発信し続け、それが全国からの支援を得る大きな原動力となる。そして、同ブログ（http://blog.canpan.info/master_kkns）は、2008年、「CANPAN第3回ブログ大賞」グランプリに輝いている。

また、宮城大学大学院事業構想研究科修士課程（2004年～2006年）を経て、2009年4月、同研究科博士課程に入学し、くりこま高原自然学校の実践に基づく研究に取り組む。

〔くりこま高原自然学校の沿革〕

1996年、約6年間の準備期間を経て、開校。エコ・ビレッジ構想に基づき、「くりこま高原・暮らし環境実験村」として、手作りで生活環境を整えつつ、青少年のための野外教育事業や自然体験プログラムを実施。

2003年には、NPO法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所を設立。

これまでの主な活動として、文部省委嘱事業「『長期子ども自然体験村』くりこま高原パイオニアキャンプ」（1999年～）、WAM（独立行政法人福祉医療機構）助成事業「不登校・ひきこもりのための長期寄宿の自然体験学校」（2000年～）、「森のようちえん」（2005年～）、厚生労働省委嘱事業「若者自立塾」（2006年～）等がある。

2008年6月、岩手・宮城内陸地震により大きな被害を受け、スタッフは避難を余儀なくされるが、それを契機に本校に次いで松倉校を開校し、活動を続けている。